特集 誰もが安心して暮らせる地域づくり

～さんかく塾 課題編 「地域で支える介護のしくみづくり」より～

6月29日に開催しました「さんかく塾【課題編①】」では、「地域で支える介護のしくみづくり」をテーマに津止 正敏さん（立命館大学教授）をコーディネーターにお迎えし、小宮 俊昭さん（認知症の人と家族の会滋賀県支部副代表）と南部 直美さん（東近江市社会福祉協議会かじやの里の新兵衛さん所長）による実践事例の紹介がありました。今、日本の家族構成や地域社会が大きく変わりつつあります。そこで、介護を通して男女共同参画の地域づくりを考えましょう。

男性介護者の立場から

小宮　俊昭 さん

母が認知症になり、仕事を辞め、自宅に引き取ることになりました。既に妻を亡くしており、自分一人で母を看ることになり、孤立感に襲われました。しかし、「認知症の人と家族の会」を知り、入会したことで、愚痴を言い合える仲間が出来て、心の支えとなりました。自身の体験からも、レスパイトケア※等の介護サービスは早く利用し、息抜きの時間をとってもらうことを勧めます。また、地域の結びつきを大切にして、介護する家族の日常を理解し合える関係をつくっていきたいと考えています。

※「レスパイトケア」とは一時的にケアを代替し、リフレッシュを図ってもらう家族支援サービス

かじやの里の新兵衛さんでの取り組み ～地域で見守る介護～

南部　直美 さん

地域密着型のサービスとして、小規模多機能型居宅介護事業「かじやの里の新兵衛さん」を実施しています。認知症になっても安心して住み続けられるまちづくりのためには、認知症という病気を正しく理解し、早期発見することが大切です。地域での早期発見につなげていくためには周りの人が「認知症では」と思ったらその家族に伝え・伝えられるような「お互い様」の関係づくりが不可欠です。同所では、認知症啓発の一環として認知症徘徊高齢者の早期発見・保護訓練についても地域ぐるみで取り組み、認知症の方に安心してもらえる声かけ方法も学んでいます。

また、「かじやの里の新兵衛さん」の運営には、「NPO法人かじやの里」を中心とした地域の皆さんにもかかわっていただいており、このことにより、同所が介護予防・生きがいづくりの場になるとともに、同所を含む、この地域一帯が福祉モール※としての空間を形成しています。

かじやの里の新兵衛さん

※「福祉モール」とは「安心して暮らせる地域」をつくりたいというそれぞれの事業所の思いをつなげていく福祉の空間

社会とつながる介護

津止　正敏 さん

高齢世帯の増加に伴い、配偶者間の介護では、夫が妻を介護するケースも増えています。しかし、夫が今まで家事や地域社会とのつきあい等の機会が少ない場合、夫も要介護側の妻にとっても、ストレスの多い介護となります。男性が自分の介護体験を周囲に伝えることで女性が我慢してきた介護の課題が可視化され、社会の問題として認識されるようになります。

また、今まで介護する人への支援はあまり問題にされてこなかったように思いますが、これからは介護者の経済的・精神的・健康上の支援が重要です。介護は百人百様ですが、誰でも「ケアされて暮らす」ことは避けられません。地域で介護者を孤立させないこと、「ちょっと助けてください」「ありがとう」と言い合える地域づくりをすることで、介護者の心が軽くなるのです。つまり、普段の地域活動において、想像力を磨いてその人のことを自分のこととして思いやるようにする、介護という人間らしい行為をする人に思いを馳せるように意識することが重要です。

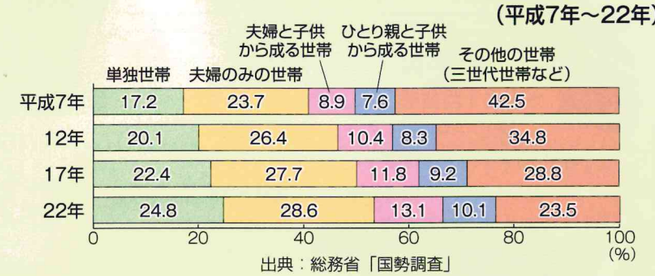
（参考文献）「ケアメンを生きる」　津止正敏著　発行所：㈱クリエイツかもがわ
「しあわせの社会運動」津止正敏著　発行所：㈱かもがわ出版

データからみた介護の現状と男女共同参画について

私たちを取り巻く環境の変化

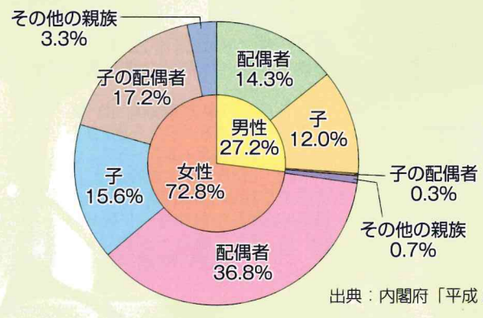
平成22年国勢調査では、65歳以上の世帯員がいる世帯に占める「単独世帯」の割合をみると、24.8%となっており、4世帯に1世帯が一人暮らしの世帯となっています。平成7年以降その割合は上昇を続けています。（図1）

図1 65歳以上世帯員のいる一般世帯の家族類型別割合の推移（平成7年～22年）



出典：総務省「国勢調査」

図2 介護時間が「ほとんど終日」の同居の主な介護者割合（男女別）



出典：内閣府「平成25年度版男女共同参画白書」

家族内介護の主な介護者のうち、約3割が男性となっています。介護時間が「ほとんど終日」の同居の主な介護者を見ると、全体の約7割が女性となる等、介護の負担が女性に偏っています。（図2）